



【知恵ある人生とは】

聖書本文: 箴言 3章27-35節/ 暗唱聖句: 箴言 11章25節

説教者: 鄭南哲 牧師
(Rev. Jung nam-chul)

2015年 クリスチャンプレイズチャーチの2月一週目の主日礼拝に来られたみなさんを救い主イエス・キリストの御名によって歓迎し祝福します。始まった2月も主の御言葉に深く根をはって揺るがされることなく、おりにかなって豊かな実を結ぶ時間となりますよう祝福します。先月より、さらに信仰が成長され、キリストの弟子となって、救い主イエスキリストが我々に示して下さったようにひざまずいて兄弟の汚い足をも洗って、仕えて下さったように2月にも共に支えあい、仕え合って尊く用いられるクリスチャンプレイズ教会の全家族となりますように祝福します。

<1. 箴言>

今日は昨年から続いている旧約聖書講解メッセージ20番目となる箴言の御言葉です。

箴言という意味は“教え、いましめになることば”という意味です。

もともとこの聖書のヘブル語の題目は‘ミシュレイシエロモ’、つまり‘ソロモンの箴言’だという意味です。

31章に構成された箴言はソロモン王すなわち、彼は紀元前10世紀、971-931年までイスラエル統一時代の王ですのでいまから約3千年以上の前記録された神様の言葉を通して記録されましたが、最後の2章、つまり30章と31章だけは神がほかの人を通して記録されたところであります。つまり30章はヤゲの息子アグルによって記録され、31章はルムエルという人によって記録されました。箴言書はよく“天の知恵を人間の言葉に表した知恵の書”だと言います。我々の日常の生活のための教科書であり、案内書だと言えることができます。

<2. 箴言書の目的>

すべての聖書はみなはっきりとした目的があります。すると箴言が与えられた目的はなんでしょうか？ 箴言が記録された目的は箴言の始めのところに表されています。1章2-3節をみてください。

“これは、知恵と訓戒とを学び、悟りのことばを理解するためであり、3 正義と公義と公正と、思慮ある訓戒を体得するためであり” いろんな大切なことばで記録されていますが、**箴言は神からの真の知恵をもって正しく生きるための知恵という言葉です。**

そういうわけで箴言書で頻りに知恵という言葉が使われているのです。

たとえば、箴言 3章だけみても、“**幸いなことよ。知恵を見いだす人、英知をいただく人は。その儲けは銀の儲けにまさり、その収穫は黄金にまさるからだ。**”(箴言3:13-14) ,15節には、“**知恵は真珠よりも尊く、あなたの望むどんなものも、これとは比べられない。**”

このように箴言では知恵を強調していますが、箴言で大事に言われている知恵とはどんな知恵でしょうか？

箴言9章10節でははっきりと記されています。“**主を恐れることは知恵の初め、聖なる方を知ることは悟りである。**”

そういうわけで、箴言は神様を恐れ、神様を正しく知ることであると書かれています。

それでは生きておられる神様を正しく知り、悟られた人はどう生きるのでしょうか。真に神を恐れ、神を知り、信じて賢く生きるとはどんなことでしょうか。

<3. 知恵ある生き方への追求>

箴言で言われている`知恵`とは抽象的理論ではなく、実際の生き方であると教えています。箴言で扱われている主題はとっても具体的です。知恵と愚かさ、財物と所有、貧しさと豊かさ、いのちと死、親と子ども、高慢と謙遜、義と裁き、愛と嫉妬、隣人への配慮などの課題を扱っています。実はこれが全部知恵ある生き方への追求です。

ですからみなさん、箴言は31章で構成されているので、一日一章ずつ読めば、一ヶ月の間、全部読めるので、我々の日常の生活を賢く、豊かにして生ける神様からの御言葉であります。ですから箴言は旧約聖書の中で**一番実際の、具体的な聖書**だとも呼ばれているのです。

<4. 知恵ある生き方: 隣人のための配慮>

今日の本文の箴言の御言葉では知恵ある者、神を正しく知り、信じた者とその人生について特に隣人との関係において神様を正しく知り、信じる者としてどのように行動すれば正しいのか語っています。

今日の本文3章27節をみてください。“**あなたの手に善を行なう力があるとき、求める者に、それを拒むな。**”と言われます。

29節によると、“**あなたの隣人が、あなたのそばで安心して住んでいるとき、その人に、悪をたくらんではならない。**”と言います。

“**安心して**”という言葉は‘**平穩に、平安に**’という意味です。あなたの隣人があなたと共にいるときその人に傷つけてはならないと言う意味です。

30節をみると、“**あなたに悪いしうちをしていないのなら、理由もなく、人と争うな。**”と書かれています。自分に害を与えてない人と争ってはならないという御言葉です。

31節には、“**暴虐の者をうらやむな。そのすべての道を選ぶな。**”と書かれています。暴力を使う人をうらやましがらないで、その行いをもまねしないようにという意味です。これらの箇所はすべて隣人との関係についての教訓だということが分ります。

箴言11章25節には、“**おおらかな人は肥え、人を潤す者は自分も潤される。**”そして、14章21節には、“**自分の隣人をさげすむ人は罪人。貧しい者をあわれむ人は幸いだ。**”

特に、我々は隣人との関係において自分より弱かったり、下だと思われる傾向があります。そして貧しい人に対してはけちくさく、だやすく裁いたり、自分のことでないように無関心になりやすく、自分の隣人の範囲に入れようとしにくい傾向があります。それがむし

る自分のレベルや教養が落ちるのではないかとひそかに思ってしまう時があるのではないのでしょうか。しかし箴言19章17節では“寄るべのない者に施しをするのは、主に貸すことだ。主がその善行に報いてくださる。”と言われました。“貧しい者に施す者は不足することがない。しかし目をそむける者は多くののろいを受ける。”(箴言28:27)と教えながら、特に力のない弱い、隣人、助けが必要な隣人をかえりみることを神様は我々にすすめています。これは箴言だけではなく旧約聖書全体を渡って神を知り、信じる人たちは特に、隣人との関係において大切に強調されている部分です。

申命記15章をみてください。“貧しい者が国のうちから絶えることはないであろうから、私はあなたに命じて言う。「国のうちにいるあなたの兄弟の悩んでいる者と貧しい者に、必ずあなたの手を開かなければならない。」”(11節), 7節にも, “あなたの神、主があなたに与えようとしておられる地で、あなたのどの町囲みのうちでも、あなたの兄弟のひとりが、もし貧しかったなら、その貧しい兄弟に対して、あなたの心を閉じてはならない。また手を閉じてはならない。”と言われました。10節では“必ず彼に与えなさい。また与えるとき、心に未練を持ってはならない。このことのために、あなたの神、主は、あなたのすべての働きと手のわざを祝福してくださる。”と約束されました。

旧約イザヤ書58:6-11には、イスラエルの民が神様に叫びながら、なぜ我々をかえりみてくださらないのか、断食して神様を叫び、求めているのに、なぜ耳を傾けてくださらないのかと訴える時、預言者イザヤを通して伝えられた神様の御言葉は、まことの断食とは宗教的儀式ではなく、心からの施しと分け与えだということでした。

<5.知恵のある者の具体的な行い・愛の分かち合い・愛の仕え>

今日の本文の箇所では“あなたの手善を行なう力があるとき、求める者に、それを拒むな。”と言われました。今我々の所有は何のためなのでしょう? すくなくともクリスチャンにおいての所有とは自分だけのためではありません。それは二つの意味をもっています。

一つ目は神様に仕える道具であり、二つ目は隣人に仕える愛の道具であります。フランス宗教改革者であり、神学者として尊敬されたカルベン先生(John Calvin, 1509-1564)はこのように言いました。“なぜ神様は我々にお金もしくは物質を与えてくださったのか? 所有もしくは財産とはそれをもってどうやって神様の愛を表すのか試すために我々に与えられたのである!”と言いました。そして彼は当時クリスチャンたちに社会でこうチャレンジしました。“低いところから高いところに行く機会がありますか。そしたら高いところまであがってください。なぜなら高いところまであがるとほかの人のためにもっと奉仕がたくさんできるからです。”つまり自分の損得(そんとく)をはかって、自分の利益と貪欲、高慢のために生きる人ではなく、高い地位や、成功、お金をもうけること、勉強をして、学位を取ることも、神の栄光のため、そして回りの多くの助けが必要な人を助けるためにしなさいという意味で言われたと思います。

そして、ドイツの宗教改革者であるマルティンルテル先生はすべての職業はその仕事につくようにと神様が召してくださったので、すべての職業においての神様の召命論を主張しました。中世時代はただ聖職者になることだけが神様の召命だとみなされました。しかし、ルテル先生はどんな職業でもその職業は二重的意味を持つのだと強調しました。

一つ目はその職業に最善を尽くすことが神様に仕える事であり、もう一つは隣人に仕える行為だと言いました。どういう意味ですか? 我々が持っている職業、いまやっている仕事の目的とはこの世の中で神様の栄光を表すだけではなく、隣人に仕える道具になるという意味です。

ですから、我々に与えられた物質は自分だけのものでないことを覚えましょう。我々の知識、我々の名誉、健康、物質、時間などこれらのすべては縦(たて)には神様に仕える道具であり、横(よこ)には隣人に仕えるための道具である事を覚えましょう。この意味は神を正しく信じている者は今自分が持っているすべてのものが自分のものではなく、神のものであって、主から一時的に自分に預かっているものである事をいつも覚えています。そのような信仰を持っている人はただ自分の所有として、祝福として握っているのではなく、またまわりをかえりみて、助けが必要な人に惜しみなく分け与えることができる知恵ある生活を送るという意味ではないのでしょうか。みなさんは今まで、あるいは最近神様から与えられたこの道具を用いて神様と隣人に分け与え、仕えて来ているのでしょうか?

正しく生きている信仰、それで知恵ある人生はかならず愛を分け与える行いを伴います。

愛する信仰の家族のみなさん! 動いているものが当たり前のように生きているように生きている信仰はからはず、動きます。その信仰の行いは愛の仕えと分かち合える行いに表されます。ルカの福音書6章38節にイエス様はこう言われました。

“与えなさい。そうすれば、自分も与えられます。人々は量りをよくして、押しつけ、揺すりいれ、あふれるまでにして、ふところに入れてくれるでしょう。あなたがたは、人を量る量りで、自分も量り返してもらいからです。” 順番を覚えましょう。

神様は与える人にかならず豊かに報い与えてくださるという約束が書かれているのです。私たちの神様には負い目になさることは決してありません。かならず、神様は報いてくださいます。ですから私たちが善を行って、ほかの人を助けてもてなしてあげたのに‘何、お礼の一言もない’と怒る何の必要もありません。人に何か期待し、願わなくても大丈夫です。なぜなら神様はそれを見てかならず報いてくださるからです。“人々は量りをよくして、押しつけ、揺すりいれ、あふれるまでにして、ふところに入れてくれるでしょう。”という御言葉は神様の豊かな約束です。“量りをよくして(メロンカルロン:よい分量)”という意味は“ふさわしい分量で与えられる”という 意味です。ですからこの箇所の意味は自分にできるだけ多く最大限与えられるという意味です。

みなさん、この御言葉を通して教えられることはまず、何でしょうか。神様は私たちがキリストにあつて豊かな人生を送ることを望んでおられるので、そのために私たちが与える者として生きることを示してくださっています。私たちはだれに与えるべきでしょうか。‘誰にでも助けが必要な人に与えなさい’と聖書は言われます。どんな時に与えるべきですか。いつでも必要な時に迷わずに与えるべきです。「与えなさい」という言葉は命令形として「困っている人々のためあらゆる物を与えなさい。」という意味です。そして「受けることを願う前にまず施

す人になりなさい。」という意味も含まれています。真に神を信じ、知恵ある者は回りの人々に分け与える事が神から自分にさらに豊かに与えられる事を知り、その祝福の秘密を経験しているためけっして損だと思いません。

世界の鋼鉄王と言われたカーネギーは“**お金を残して死ぬことは恥だ。すべてを神様と隣人のために全部使って死ぬべきだ。**”と言いました。正しいことだと思います。彼が一生涯良いことのために使ったお金は約**300億円**くらいほどだったそうです。

時々、我々は‘自分の使う分も余裕がないのに、足りないのにどうやって...’と言います。これは本当に足りないからではなく、自分の基準でもっと持ってないと思う欲張りのため分け与えることができないという意味にもなります。神様は我々にもっと与えられて、もっと豊かになりたいなら、先に分け与えるようにと仰せられます。

今日の本文では“**あなたの手善を行なう力があるとき、求める者に、それを拒むな。**”と言われました。これは大いに**施し、特別たくさん分け与える物質と余裕を前提していません。あなたの手でできるわずかなことでも仕え、分け与える事をしなさい**ということ

です。ユダヤ人たちの間で、言われてきている話の中でミドラシという話があります。モーセが死ぬ前に救済について民たちにこのように教えます。“あなたがたが救済をよくすればのちには豊かになって、お金を借りに行く人もなくなってくるはずだ。”すると民の一人が“そしたら、自分の所得のいくらかを救済すればいいのでしょうか。”“10分の1なら十分でしょうか。”“もし私に救済するお金がないのに、また来たら、手ぶらで帰してもよろしいでしょうか。”この時モーセはこう言ったそうです。“お金がないなら助けが必要な人に親切(暖かい一言でも)を与えてください。これはお金よりもっと大きいものを与えることとなります。”**イエス様を信じている我々なら、自分中心から他人中心に考えが変わらなければなりません。**

<結論:愛の分け与えるところに神はおられる>

アメリカを建国(けんこく)した清教徒(せいききょうと)クリスチャンたちはささげものについて二つの責任を強調しました。一つは、神様に感謝を捧げるべき責任であり、もう一つは、困っている隣人に分け与えるべき責任だったのです。そのためする、清教徒クリスチャンたちが建国したアメリカでは、富を社会に還元(かんげん)する国の始めの時から寄付の文化が定着されている事が分かります。ビルゲイツ、パフエジット、カーネギー、ロックフェラー、ヘンリフォードなど、私たちがよく知っている人たちは、お金を稼いだだけではなく、それを豊かに分け与えた人たちでもっと有名な人たちです。彼らは、自分たちに財産を築き上げさせてくれた教会の家族や市民のために感謝の心を表して、教会や地域の福祉施設である図書館や学校、孤児院、老人ホームなどを建てて、その恩に感謝を表したのです。それはすべてアメリカの国が始まるころの清教徒クリスチャンたちが神様に2つの責任を保った事が国の根本と土台になったから今日までその信仰と精神が流されているのではないのでしょうか。今年も我々にも同じ責任が与えられています。神様に感謝を捧げるべき責任、そして困っている隣人に分け与える責任です。その責任を果たしているうちにいつの間にか自分自身が、家族が、教会が、この町、この国が変わって行くと思えます。

ヨーロッパのテゼ共同体では聖餐式をするたびにこのような賛美を歌っているらしいです。“**愛の分け合うところに神様はおられる。**”もちろん、聖餐のパンは我々の贖いのための十字架ですべてをお与えて下さった主イエスキリストの体を象徴します。しかし、同時にこのパンは主の恵みにより救われたクリスチャンたちが自分の欲張りを捨てて、神の御前で自分のことをも惜しみなく助けが必要な隣人のため喜んで分け与えられる愛の仕えと愛の決断をうながしています。

メッセージをまとめます。新しい2月に箴言をとおして神様から与えられた御言葉はなんでしたか?

神を恐れ、正しく信じる者はかならず、神様だけではなく、隣人への愛と仕えと分かち合えること、それが神の前で愚かな人生ではなく、知恵ある人生であると教えて下さいました。これこそが自分たちがもっと豊かに生きていける秘訣であり、神様の祝福を験できる知恵であると学ばされました。愛するみなさん！これをただ道徳的に教えているのではなく、信仰による生き方、真の知恵を頂いた生き方であることを教えてくださっている事を覚えましょう。まことのクリスチャンであるなら、このように自分だけではなく、これからは隣人を愛し、仕え、分かち合いながら生きるべきであると言うことです。神様の豊かな満たしを経験したいなら、このように分け与え、仕えなければならぬと言うことです。

今も生きておられる神の前で、まことの知恵は何でしたか?ヤコブの手紙1章27節をご一緒に読みましょう。

“父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることで”今日の本文である箴言の言葉が表している神様はどんな方でしょうか？神様は知恵の根本であることを啓示しています。神様は知恵の源であると言っています。知恵の創造者(箴言3:19,8:22-31)であり、知恵の授与者であります。(箴言2:6-8)そして、知恵ある裁き主(箴言3:11-12,5:21,6:16-19)であると記されています。ですから、箴言で表されている神様は知恵の神様です。その知恵ある生き方とはほかの人を配慮し、仕える実際の行いである事を教えて下さいました。

我々が生きているこの世は自分の祝福、自己出世しか考えず、自分だけのために、自分だけを愛し、自分ではないほかの人がどうなるかは関心がなく、ますますつめたい社会になっています。創造主なる神様を信じている我々でさえそのように生きてはいけません。真の救い主、愛のイエス様を信じている人々までそのように生きてはいけません。神様を正しく知って、信じている我々こそがひややかで暗くなっていくこの世でキリストの真の愛と生き方を示さなければなりません。神様を知っている知恵を持っている私たちこそまことの正しい生き方を模範として分け与えようではありませんか？

今日与えられた箴言の知恵の御言葉の通りに施し、分け与え、仕えることから始まったこの2月もさらに豊かに神様の満たしを経験する祝福の主人公たちとなりますよう主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン!!!!!!